

算命学中庸

【初年】 21回目

21回目の授業はこのページからです。

授業科目 【算命学の占い】

【初年】 21回目 【算命学の占い】 01

これからの勉強は、実践的な事象が多くでてくるようになりますし、占いの技法もでてきます。

そこで、算命学の考え方として、知っておいて頂きたいことがあります。

自然思想

融合思想

人間は自然物であり、
自然の法則からはずれることはない

算命学のなかに「自然思想^{しぜんしそう}」と「融合思想^{ゆうごうしそう}」という言葉があります。

この二つは『人間は自然物であり、自然の法則からはずれることはない』という、算命学の根本的な考え方といえます。

はじめの授業のときに、『人間は自然物である』という算命学の考え方をまなびました。

〔たとえば〕人生を考えるとき、あるいは世の中のことを考えるときにも“善悪の基準を自然の法則に則して”その事象を考えます。

なぜなら——人間は自然物と考えているからです。

自然の法則を基にして、善悪の基準を考える

善悪の基準も、自然の法則をもとにして考えます。

〔たとえば〕世間一般には、〔これは良いことです〕とか〔これは悪いことです〕という基準があると思います。おそらく皆様も、自分のなかに、善悪の基準をおもちでしょう。〔こういうことはよくない——〕とか〔これはよいこと——〕だと、大体、自分なりの判断基準をおもち

でしょう。

そのときに、なにを基準にして、善悪を考えているのか
たとえば、多くの場合は“法律”あるいは“世間の常識”
あるいは“両親とか学校で習った道徳的価値観”などを
基^{もとい}にして、善悪を考えている場合が多いとおもいます。

算命学の考え方は、“自然の法則のほうが重要である”と
しているのです。

世の中の常識・経験などで判断した場合に、自然の法則
と一致している場合もあれば、一致していない場合もあ
るでしょう。

〔たとえば〕中国の古い^{ことわざ} 諺 に――、
人間万事塞翁が馬（にんげんばんじさいおうがうま）という諺が
あります。ご存知の方もいらっしゃるはずです。
簡単にご説明しますと（説にいくぶんのずれがあるでしょう）、
中国で昔、塞翁^{さいおう}と呼ばれる占いの先生がいました。
有名な先生だったそうです。塞翁は見事な名馬を飼って
いて、村でも評判だったそうです。
ところが、その馬がある日、逃げてしまったのです。

そのことを知った村人が塞翁に、「先生、あんないい馬がいなくなって、さぞがっかりなさったでしょう」といったところ、塞翁は「馬がいなくなったことが悪いことだとは限らない」と^{こた}応えたそうです。

そうして、しばらくしたら馬が戻ってきました。しかも、野生の馬を何頭も引き連れて、一緒に戻って来たのです。馬が逃げたおかげで、馬が増えたわけです。

今度は馬が増えたものですから、村人が「先生、馬が戻ってきたし、たくさん仲間が増えてよかったですね」と、いったところ、塞翁は「馬が戻って来たことが良いことだとは限らない」といったそうです。

塞翁には男の子がいました。

息子が戻ってきた馬に乗っているときに、落馬して大怪我をして、足が不自由になってしまったのです。

また、村人が来て、「息子さんがあんな事になって、さぞお悲しみでしょう」といったところ、塞翁は「足が不自由になったことが、悪いことだとは限らない」と応えたそうです。

何年か経^へて、足の不自由な息子が、大人になった頃に、その周辺で戦争が勃発^{ぼっぱつ}して、村の若者達のほとんどが、戦争に駆^かり出されて、戦死してしまったのです。

ところが、塞翁の息子だけは、足が悪かったので、戦争に駆^かり出されないで命が助かった。という逸話^{いつわ}です。

世間一般の考え方としては、すごく立派な馬を飼っていたのに、その馬がいなくなったとしたら、がっかりするでしょうし、大きな損失だと思ったりしますよね。

ところが、塞翁は馬がいなくなったことが、悪いことだとは限らない。といったわけです。

その馬が数頭の馬を引き連れて戻って来たら、ふつうは喜ぶでしょう。(古き中国の時代です)

塞翁は馬が戻って来たことが“よいこと”だとは限らないといっています。

一人息子が馬に乗って大怪我をしました。足が不自由になるほどの重傷を負えば、なにかの禍^{わざわい}ではないかと思うかもしれません。しかし、塞翁がいったように、悪いことに繋^{つな}がるとは限らなかったわけです。

……人生は先が見えません。

私たちは、盲目で人生という道を歩んでいるようなものです。どの人にも、人生行路のなかで「苦難」ともいえるような出来事が起こりえます。

算命学で占いをするときには、自然の法則を基盤にして、善悪の基準を考えます。

それゆえに、世間の常識とか、ときには法律とか、あるいは、自分の人生の経験に照らし合わせたところの——、
〔あれはよいことだ〕〔あれは悪いことだ〕とかいうような思いとか考え方を“いったん脇において”観ていかななくてはいけないのです。

算命学で鑑定をするときには（宿命を観るときには）、自分の感情や世間の常識、ときには国の法律などを除いて判断すること。

これが、算命学で占いをするときの「心構え」のようなものだと、おもって頂ければよろしいでしょう。

特に、ここで大事ななのは、自分の感情とか、世間の常識です。

人間ですから、占う側のほうに、どうしても自己の感情が入りやすいのです。

あるいは、世間の常識や既成概念で「これは良いこと」「これは悪いこと」と、というような固定観念があると、占いの判断を間違えてしまった。ということが起きやすいものです。

〔たとえば〕会社で出世した。とします。

今度、課長になりました。あるいは、部長になりました。それを耳にした、部下なり、知人たちが、「おめでとうございます」とか「良かったですね」とかの言葉を唇くちにするでしょう。

ところがです——お褒ほめにあずかった人物は、出世したことによって、自分の寿命を縮めるかも知れませんし、夫婦仲、あるいは、子供との関係がギクシャクするかも知れません。

出世したことによって負担が大きくなるし、ストレスも大きくなるし、仕事も大変になるでしょう。

出世したことで、無理をしなければならなくなります。

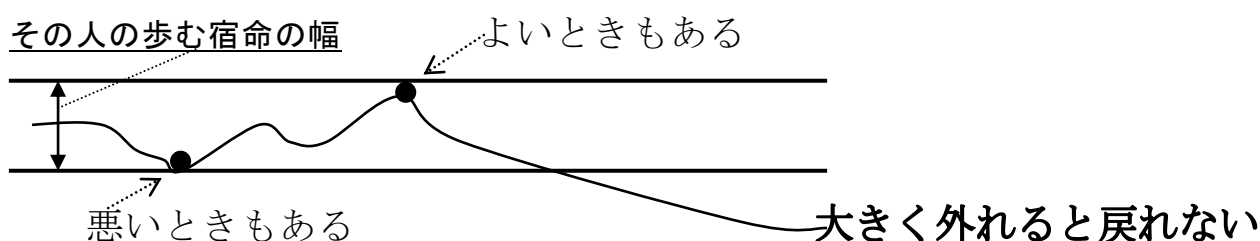
もしかしたら、出世したことによって、病気で倒れるか

も知れないし、ひょっとすると、命を落すようなことにつながるかも知れません。

あるいは、その人物の人生そのものが曲がってしまう。そうになってしまうかも知れないのです。

本来の「宿命どおりの道を歩めなくなる」という可能性もあります。

宿命（1）宿命の道



自分の宿命から大きくはずれてしまうと、もとに戻れなくなります。結果的に命を落とすことにも繋がります。実際の占いの過程で、そういうことはよくあるのです。

「仕事で成功しました」とか「出世しました」とかいう人がいたとしても、その宿命を自然の法則との兼ね合いを観たときに、出世したことが、その人の運勢が落ちる起因になった。ということもあるのです。

☞ 1994-7-2 FIFA ワールドカップ代表選手アンドレス・エスコバル（コロンビアの選手）が、試合に負けて帰国した後に射殺されました。詳細はネットに掲載されています。

＊ アンドレス・エスコバル 1967-3-13～1994-7-2 [27歳死]

宿命（2）アンドレス

	丙 癸 丁		石門星	天堂星	3 壬寅
申	子 卯 未	牽牛星	玉堂星	石門星	13 辛丑
酉	丁	天報星	牽牛星	天恍星	23 庚子
	乙				33 己亥
	癸 乙 己				

ふつうに考えれば、ワールドカップの出場選手に選ばれて、大会に出場したのは大変な名誉です。でも殺されました。ワールドカップに出られなかったほうが、幸せな人生を送ることができたかも知れませんし、サッカー選手にならないほうが、幸せになれたかも知れません。

この事象はあくまでも、“幸せになれたかも”であって、彼はサッカー選手人生に悔いはなかった——のかも知れません。皆さまはどのように・想われますか [27歳死] ……？

☞ スポーツ選手でオリンピックに出場して金メダルを取ったけど、そのことが人生を間違えるきっかけになることもあるわけです。ゆえに、オリンピックに出場したことが、必ずしも良いとは決まっていないのです。

「オリンピックで優勝する」これは大変なことなのです。その裏で犠牲になる人もいますよ。親・兄弟が多いです。

あるいは、結婚式によばれたら、「おめでとうございます」と、ご挨拶するでしょう。しかし、その結婚が本当に、お目出度いのかどうか——わからないのですよ。

本人同士は幸せになったつもりで、周りの人も良かった良かったといってくれても、もしかすると、その結婚がその人の苦しみの始まりということもあるのです。

その裏に横たわっている事象については、世間の常識とか、自分の感情とか、あるいは国の法律とかに照らし合わせて測^{はか}っても、まったくわからないことです。

結婚して、新婚旅行に出発しましたが、飛行機が落ちて亡くなってしまった。そう人もいますでしょう。

結婚しなければ、あるいは旅行に行かなければ、死ななかつたかもしれません。

1997年11月17日——エジプト「ルクソール王家の谷」の近くでイスラム過激派が銃を乱射して、日本人の旅行者10人（ほとんどが新婚旅行）が殺されました。

普通であれば、新婚旅行でエジプトに来て楽しむ、幸せな時間のはずです。ところが一瞬にしての^{わざわい}禍です。その人たちは、幸せな結婚をしたと思っても、その実、自然の法則で考えたときに、非常に悪い結婚だった。ということもあり得るわけです。

もちろん逆もあります。

〔たとえば〕悪い相手とは思わないけど、なかなか気乗りがしない——でも親が結婚しなさいというし、まわりも^{すす}薦めるので、仕方なく結婚したら幸せになった。そういうこともあり得ます。

結婚式にお呼ばれしたら、「おめでとうございます」と、いうのは世間の儀式です。そのとき「この結婚って、本当におめでたいのか、どうなのかわからないよね」と、小声のつぶやきであっても、聞かれたら大変ですよ。

大変ですけど——算命学的にはそのように想定することも必要なのです。

⇒ 大阪の池田小学校の事件でも、[宅間守]という犯人が8人の子供達を殺しました。

国立の小学校はなかなか入学するのは難しいですね。

そうしますと、合格した子供たちも親御さんたちも、池田小学校に入学が決まったときに、とても喜んだはずですよ。子供の将来を考えて、池田小学校へ行かせればと思って国立へ入学させたわけです。でも、池田小学校に入れたことが、よかったとは限らなかったわけです。

これに類似したことは、さまざまな姿で起こり得ます。

⇒ 北朝鮮に拉致された被害者の人たち、もちろん犠牲になった方もいらっしゃいます。

拉致された人は100人以上いるそうですが、そのなかには、“拉致されてよかった”と思った人がいるはずですよ。拉致されたことが全て不幸とは限りません。という考え方です。(あくまでも勉強です。誤解のないように申し上げます)

その代表は、地村さんとか蓮池さんです。

もちろん拉致されて、大変な苦勞をされたでしょうが、結果的に子供達も日本へ帰ってきて、仲良く暮らすこと

ができましたし、まわりの方も応援してくれました。

当時の報道の限りでは、お子さんたちも順調に育っているようにおもえました。

もし、あの2組が、日本で結婚して、日本で家庭を築いていたら、もしかしたら、夫婦仲はダメになっていたかも知れないわけです。(あくまでも勉強ですよ)

二人が北朝鮮に拉致されたから、二人でチカラを合わせて苦難を乗り越えて来られた。と考えることは可能です。日本で問題も起こらず、平凡な状況で結婚生活を送っていたら、夫婦がダメになっていたかも知れません。

あるいは、子供が非行に走るなどして、家庭生活に亀裂きれつが入ったかも知れないのです。

北朝鮮という国に拉致されたことで、二人が結束して絆を深めたことで、家族がまとまっていた。ともいえるわけです。地村さんや蓮池さんが、そうだとは決まっていますし、言い切ることはできません。

原因は異なっても——なにかの問題が起こったときに、

二人が結束して、扇のかなめをしっかりと締めなおしたことで、ばらばらにならなかつたご家族もいるのです。

⇒ 親が死んだ後の遺産相続で、仲の良かった兄弟が揉めた。という状況は枚挙に^{まいきよ} ^{いとま} 違がないでしょう。

それゆえに、世間の常識とか、自己の経験で判断すれば、“それっていいことじゃない”と、思えるような出来事であっても、必ずしも、その人にとって良いことだとは限らないのです。

反対に——悪いように見えたり、思えたりする出来事が必ずしも、悪い結果になるとは決まっていないのです。

〔たとえば〕病気で仕事を辞めましたとか、リストラで辞めざるを得なかつたとか、そこだけに焦点を当てると、不幸な出来事と思えたりもしますけど、もしかすると、その人の人生にとって、絶好のチャンスなのかも知れないわけです。それをきっかけに、生き方を変えることができ、過去の経験になかつたような、大きなチャンスを自分のものに出来るかも知れないのです。

実際、世の中にはそういう人物がおられるわけです。

それゆえに――。

「息子が^{こころざ}志していた会社に入れました。そうしたら、彼女ができて息子はワクワクなんですよ」といわれても心底^{しんてい}から「おめでとうございます。良かったですね」とはいえないのです。

難関の会社に入れたから良かったとか、出世したとか、結婚したとか――世間の常識としては、^{けいが}慶賀だと思えることであっても、算命学をもちいて鑑定するときには、世間の一般常識などを、^き切り^{はな}放して、占いをするようにしないとイケないのです。

⇒ “感情” もそうです。

感情も占いの答えに影響^{およ}を及ぼすことがよくあります。特に自分の知人とか、自分自身の占いをするときなどは良いほうに、よいほうへ、と考えて、結局はその答えが間違ってしまう。ということが起こります。

逆に――自分が^{きら}嫌いな人、あの人“いや”と思っているとすれば、占いをするとき、その人の運勢の悪いところを取り出して、悪いほうに、悪いほうへ、もって行こうとする感情が入りやすいものです。

そうなる……占いの答えは違った結果になってしまいます。

それゆえに、胸きょうちゅう中に芽生えてくる好き嫌いとかの感情を排除して、考えないといけません。

⇒ つぎのことも、占うときに良く起こり得ます。

芸能人とか、世間の注目を集めている人、そういう人が覚醒剤で逮捕は多いですね。不倫騒動も多いです。

「芸能人が覚醒剤で捕まった」「不倫炎上した」そこだけに焦点を当てれば、その人物にとって大きな禍です。

芸能人が覚醒剤で捕まって刑務所に入れば、人気もガタ落ち、大変です。

女性との不倫であれば、女性ファンに叩かれて、めらめらと炎が燃えあがります。

覚醒剤でいえば、覚醒剤からの離脱は非常に難しいので、常習になってしまう人が大半です。

なかには……刑務所しゅうかんに収監されたことで、禁断症状の闘いに勝って、覚醒剤と縁えんを切って、立ち直れる人もいますでしょう。

“運よく”とはいえませんが、警察に逮捕されないで、そのまま覚醒剤を常習すれば、寿命を縮めます。そして覚醒剤欲しさに、ほかの犯行に走る可能性もあります。それなら、捕まって刑務所に入ったほうが、長い目で見たときに、その人にとっては、良いことかも知れないわけですから。

ここで申しあげたいのは、世の中の常識や経験だけで、物事を判断しますと、その裏側に横たわっている本質を見抜けないことがありますよ。ということです。

占いをするときには、「その人物の宿命にとって、なにかの事柄がよいほうへ向かうのか、悪いほうへ向かうのか」という判断をしなければならないわけですから。

占うときは、そのことを念頭ねんとうに掛けるか必要があります。

中国の古い諺「人間万事塞翁が馬」の逸話を思い出してください。

物事を考えるときに、ふつう一般でいうところの世間の常識とか、個人の経験とか、そのような基準で判断した

ときに、よく映るような出来事であっても、必ずしも、それが良いことであるとは限らないし、よい結果を生むとは限らないのです。

また——悪く見えたり、悪く思えたり、そのような出来事であっても、必ずしも、悪い結果になるとは決まっ
てはいません。

このように算命学はいつています。

【初年】 21回目【算命学の占い】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 22回目【鬼谷子】